

主任教授からのメッセージ

脳神経外科は切った張ったの荒々しい男社会とっておられる方も多いかと思います。確かに私が研修医の頃はそういう社会でした。しかし、時代の流れ、内部の改革、また、基本診療科として様々な subspeciality 領域が誕生して、それぞれの領域でのライフパスが確立したことにより、切った張ったにかかわらない脳神経外科医も誕生するようになりました。その最たるものが、脳血管内治療を専門とする脳神経外科医です。もちろん脳神経外科専門医の資格を取るまでの間は、最低限の切った張ったのトレーニングを受けますが、専門医取得後は皆、それぞれ希望する subspeciality 領域で自分のライフパスを形成していきます。それにつれて女性の参画も増加しています。当教室では、現在、国内外留学中も含めて6名の常勤の女性脳神経外科医が勤務しています。脳、神経に興味のある方は、是非、当教室の女性脳神経外科医に気軽に声をかけて話を聞いてみてください。

○ 診療科の特徴

脳神経外科では、脳卒中やそれらの原因となる脳血管障害、良性および悪性の脳腫瘍、頭部外傷、脊椎・脊髄疾患、小児中枢神経奇形、中枢神経感染症、てんかん、顔面けいれん、三叉神経痛、片頭痛、特発性正常圧水頭症など、脳、脊髄および末梢神経およびその近傍に発生する幅広い疾患の診療を行っています。

関西医科大学脳神経外科では、これらすべての疾患の診療をそれぞれの領域の専門の医師が行っています。治療に際して特に重点を置いているのが、患者さんの神経機能を温存することです。そのために、ナビゲーション、神経機能モニター装置、内視鏡、覚醒下手術など、最先端の機器や手法を用いて手術を行っています。

脳血管障害に関しては、開頭手術と血管内治療の両方の専門家がおり、その患者さんに最も適した治療法を選択して治療しています。

また当科の特徴の一つである小児中枢神経奇形の治療は、全国でも有数の治療件数を誇り、近畿一円から患者さんが集まってきます。

○ 診療科で働く女性医師

脳外科医師全体に占める女性医師の割合は5%程度と他科と比較しても少ない状況ではありますが、近年は女性脳外科医も増えてきており、子育てをしながらキャリアアップし第一線で活躍されている方も多数おられます。当科も近年の新入局員は約半数が女性であり、女性医局員の比率としては全国でも有数の施設です。

職場復帰への取り組みについて

○ 復帰までの道のり

妊娠中の業務から、体調などに応じて内容の調整を必要に応じて行います。産後は復帰のタイミング、出勤日数、短時間勤務や時間外業務の対応なども個々の状況に応じて調整を行います。

○ 研修内容

下記のようなプランを想定していますが、復帰までの期間や年次などによっても状況は異なりますのであくまでも目安であり、個々の状況に応じて対応します。いずれの場合にも指導医がしっかりとサポートしていきます。

	内容	指導下	独立
手術	開頭手術	1～6か月	7か月以降
	その他の Major 手術	1～6か月	7か月以降
	Minor 手術	1か月	2か月以降
	血管内手術	1～12か月	1年以降

検査	脳血管撮影	1～6か月	7か月以降
外来	検査	1～6か月	7か月以降
	一般外来	1～6か月	7か月以降
	科別専門	2～6か月	7か月以降
病棟	入院患者受け待ち	2～6か月	7か月以降
	救急対応（日勤）	1～6か月	7か月以降

○ 女性医師キャリア形成支援担当医師からのメッセージ

脳神経外科は業務がハードで緊急手術なども多く、体力も必要そうで女性医師には向かない、と思われがちかもしれませんが、当科では女性医局員も年々増えており、女性でも問題なくキャリア形成していくことができます。現在は2名の女性医師が子育てしながら勤務中で、それぞれにキャリアアップを目指して奮闘中です。科としてはこれまで女性医師が少なかった側面もあり、キャリア支援についてはお互い手探りの状況ではありますが、その分柔軟な対応が可能かと思っておりますので、どうぞ不安に思うことなくチャレンジしてほしいです。

▶ 復帰した医師の声

体験談（A先生）

私は3年前に第一子を出産し、産後8か月から社会人大学院生として復職しました。週2回、外来のサポートとして勤務し、外来の中で研究を行う、という形態をとってきました。昨年、第二子を出産し、産後3ヶ月から平日のみ9時から17時まで勤務しています。現在は第二子妊娠前と同様、主に外来のサポートおよび研究を行っており、そのほか病棟業務や指導医の元で手術に携わりながら、脳神経外科専門医試験に備えて勉強中です。

第一子が2歳になる頃までは発熱や体調不良となることが多かったため、私の勤務形態も育児に重点を置いて勤務を継続してきました。幸い現在は二人とも風邪をひくこともほとんどなく元気に過ごすことができているため、第一子の産後よりも出勤日を増やして出勤し、たくさん臨床にも触れることができます。

育児と仕事の両立は必ずしも容易ではありませんが、当科では他の医局員の助けもあり、勤務日数や業務内容など希望に沿って無理のない範囲で働くことができとても有り難く感謝しています。

体験談（B先生）

私は医師6年目に第一子を妊娠し、妊娠中は体調と相談しながらではありましたが、通常業務をこなしながら、無事7年目のはじめに出産しました。脳神経外科では最短で医師7年目に専門医試験の受験となり、私もその年に受験を予定していました。産後3か月ほどで育休中の受験となりましたが、幸い夫のサポートもあり無事に合格することができ、産後約5か月で復帰しております。当初は当直業務や自宅待機業務などの時間外業務は免除の形で職場復帰しましたが、子供が1歳に近づいた次年度からは当直業務なども少しずつ再開しながら、現在はフルタイムでの勤務を行うことができます。

一口に育児中といっても、各々の家庭の状況によってどの程度業務に携わることができるかは異なるかとは思いますが、当科では個々の状況に応じてその都度相談しながら業務内容の調整を行っています。子供の体調変化などで急な早退や欠勤なども時には発生してしましますが、同僚の助けも借りながら、外来や病棟業務、予定や緊急も含めた手術など、充実した日々を過ごしています。